



後編

09・町に一個しかないショッピングセンターで買い物デート

『08・二度目のデートにお誘い』の翌日。

とある年の夏。七月二十九日（水）十四時ごろ。

日本とのとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十七度程度。

少し暑いが、心地よい夏の昼下がり。

場所は、民宿からバスで三十分ほど行つたところにあるショッピングセンター。

主人公と弥映は、その中の一階にあるフードコートで、今遅めの昼食を終えたところだ。

——その前に、ここまでに起きた出来事を振り返りたい。

まず、昨日の夜は素晴らしかった。

あの後二人は朝のラジオ体操のように並んで夕食をとり、その後は弥映の部屋に戻つて仲良くデザートを食べて、食後のセックスをして。

それから汗と唾液と愛液でぐちやぐちやになつた身体を、二人で洗いつこした。

お風呂から上がつた後は、きれいにした身体をお互いに拭きつこして、乾かし合つて。クリームやパウダー、オイルを塗つて整えつこして。

なのに、それからまた、一連の行為を全部無駄にするみたいに、朝までむさぼりあつた。

そんな昨日の夜は、主人公から積極的に迫つた。

昨日とは真逆に、恥ずかしがる弥映を追い詰めて、思いつく事は全部やつた。その時の弥映は、とにかく可愛くて……。主人公は、今も思い出すだけでうつとりしてしまう。

昨日の弥映は、困つているようで、実際は期待でいっぱいの表情を浮かべながら、おらずとその身を差し出した。

そんな風に、攻められる側に回つた弥映は、ひたすらいとおしくて。
主人公に全幅の信頼を寄せるように甘えて、頼つて。

媚びた甘い声で、何度も主人公を呼びながら、すがりついてきた。
その時の事を主人公は忘れられない。多分、一生覚えているだろう。

弥映がこんなにも弱い所をさらして、自分に心を許してくれているという事が、たまらなく嬉しかつたのだ。

夜明け頃、攻められるのにも慣れて、気安い雰囲気になつてきてからの弥映もよかつた。一晩中主人公に我が物顔で身体を触られて、敏感なところを徹底的にいじられ続けて、恥ずかしい声しか出なくなるまでイカされ続けても

『ばか……♥』

と言ひながら、全部許してくれるのは、ちょっと幸せすぎた。

だから外で鳥が鳴き始めて、ようやく疲れて眠つてしまふ頃、主人公は確信した。
こんなかわいい人は他にはいない。

絶対自分が独占するし、絶対離さないと。

それから理解した。これが恋だと。

これが恋じゃなければ、自分は一生恋を見つけられないだろうと。

主人公はこの夜、ただ受け身でいる時には見えなかつたものを、たくさん見た。
弥映に、自分の望む事をして尽くしてほしいと思う以上に、なんでもしてあげたいと思
う事。

たとえば年上だとか、セックストについて自分よりよく知っているとか。

そういう、強い部分に頼りたいと思つていたはずなのに。

いつの間にか、弥映の自分に自信のなさそうなところだとか、甘えん坊で淋しがり屋で、密着するのが大好きなところだとか。

そういう、弱くてかわいい部分を、たっぷり甘えさせてあげたくなる事。

だから、すぐに不安がる弥映には、安心して眠れる位、ありつたけ優しくしたい。

なのに、同時に、息をつく間もない位いじめ抜いて、泣くほど気持ちよくさせたいと思つてしまふ事。

こんな風に、矛盾する強い感情に、振り回される事こそが恋だと。

眠る直前、弥映がふにやふにやになつた身体でぴつたり寄り添つて

『絶対手離さないでね。お手洗い行く時だつて、起こしてね』

と猫撫で声で言つた時、主人公は万能感に包まれた。

もちろんそうする、それ以外の事だつて全部する。

弥映に必要とされている限り、自分は何でもするし、できると。

つまり、これから自分の自分はきっと何でもできる。

弥映の最高の恋人になつて、弥映を生涯幸せにできると、本気で思つた。

——それが、数時間前までの主人公だ。

今もその気持ちが続けばよかつたのだが。

……だつて、外に出たらわかつてしまつた。

自分は『弥映の最高の恋人』どころか、弥映よりもずっと年下の無力な女子学生に過ぎない。

つまり、他者と競つた時、勝てる見込みがない事の方が多いと。

だつて、民宿を出てバス停に向かつて、一緒にバスに乗る頃には理解した。

想像していたよりも、ずっと弥映は目立つのだ。

たくさん人の目を惹いて、様々な視線で見られている、素敵な女性なのだと。

そこでは年老いた人も、学生も、男も、女も弥映を見ていた。

単純によそ者が目立つというだけの事なら、主人公も同様に注目されるはずだ。

でも、視線が集まっているのは、明らかに弥映の方だった。

それだけ彼女が美しく、魅力的な体型をしていて、耳を傾けたくなる声をしているという証だろう。

それでも、これで終わるのならまだいい。主人公はもつと重要な事にも気づいてしまった。

いくら弥映が主人公に親しげにして、主人公がそれに応えて。手を繋いで歩いたつて……。

誰も自分達を恋人同士だなんて思わない。

自分達はどう転んだって、せいぜい『仲のいい姉妹』程度にしか見えないのだと。

こんなの、最初からわかりきった事だつた。

それでも、主人公は思った。

今朝までみたいに伯父伯母の民宿という自分のテリトリリーで、与えられた客室という、狭い場所で。

小さな水槽で、たつた二匹で暮らす金魚みたいに、お互いだけを見つめたままでいられたら、どんなによかつただろう……。と。

そうしたら自分はきっと今も『自分こそが弥映にふさわしい』と思い込んで、どんな甘

い言葉も、行動も、いくらでも言えて、できただろうと。

だけど今はそうする自信がない。

急に自分が滑稽に思えて、どんな真剣な言葉も『恋人気取り』のたわいないものに聞こえてしまいそうで。

怖くて、できなくなりそうなのだ……。

だけど、そんな主人公の気持ちに、弥映は気づいていないのだろう。

今もとても幸せそうで、満足げだ。

それはとてもいい事だ。いい事なのだが……。

※音声ここから※

SE1 シヨツピングモールのフードコートの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

●中央

「上機嫌でため息をつく」

はー……
♥

【少し間をあけてから】

いっぱい買ったねえ
♥

もうこれでしばらくは大丈夫だな。

【少し間をあけてから】

そしたら。欲しいものは皆（みんな）買えたし。もう少ししたら帰ろつか

（主人公）

「よかつた」

主人公、複雑な想いを抱えながらも、上機嫌の弥映に優しく微笑みかける。

そうだ。弥映が楽しそうなのは喜ばしい事だ。

実際、買い物 자체は順調に進んだ。

主人公は問題なく民宿からショッピングセンターまでを案内できたり、買い物中にトラブルが起きる事もなく、たとえば昼食の店選びに失敗するとか、欲しいものがまるで見当たらないとかといった、気まずくなる要因すらなかつた。

だから……今朝から今まで、主人公がずっと己の『現実』のようなものを思い知らされ続けた事以外は、とても楽しかったのだ。

……ただ、気になる事はある。

〈主人公〉

「……でも、弥映ちゃん。靴は買わないの？」

主人公、先ほどから気になつていて事を切り出す。

そうなのだ。弥映は今も、主人公がプレゼントしたサンダルを履いている。
正直なところ、それは安物だ。

履いて行ける範囲は、せいぜい家からコンビニ、あるいは近所のスーパーあたりが限の山だろう。

弥映のコーディネートの中でも浮いているし、これを気にしていないのは、おそらく弥映自身だけだと思われる。
だけど……。

●中央

「上機嫌であっさりと。

『もう満足しているので、そのつもりは最初からない』という感じで
んー？ 靴はいいよ。あんたがくれたのがあるもん♥

【少し間をあけてから】

はあ。すっごい楽しかった。

バス。田舎の古い奴だつて言うから『どんなのよ』って思つてたのに。
可愛かつたね。

エアコン効いてるから、ずっと手繫いで乗れだし。

【少し間をあけてから。

繫いでいる手に目をやつて、軽く振つてから話すイメージで】

今も繫いでるけど。ふふふふ。

【少し間をあけてから。

ドキドキしながら切り出すが、なかなか全部言えない】
で、ね？ あの……

そうだ……。

主人公、弥映が何か言いたげなのには気づかないまま、思う。

そうだ。今日は弥映ちゃんがずっと手をつないでいてくれたから、何とか私は己を保つ事ができた。

弥映ちゃんのあつたかくてふにふにの手に、自分の手をぎゅっと絡めながら、
『私は、弥映ちゃんに必要とされている』

『たとえ他の人からどんな風に見えても、弥映ちゃんは、私の事を恋人として扱ってくれ
ている』

そう思えたのだ。

だからこそ、私はまだここで終わっちゃいけない。

周りの人が私をどう見るかなんて、全然重要じやない。

弥映ちゃんが私をどう見てくれるか。それが大事だと思うのだ。

だから、主人公は今、あえて弥映の手を離す事にする。
やるべき事があるからだ。

〈主人公〉

「あの。弥映ちゃん。その、手なんだけど」

●中央

「自分も話したい事があるが、主人公が先に話し始めたので、先に聞く事にするうん？」

「上機嫌で。

主人公がこれから『手を離していいか』と言おうとしているなど考えもしないうん♥ お店涼しいからずっと繋いでられるね♥」

〈主人公〉

「離してもいい？」

●中央

「あからさまにショックを受けて」

※大げさな印象にならないようにお願ひします※

へ？ なんで？』

主人公が切り出すと、弥映はあからさまにショックを受けた顔をする。

主人公は、それがとても嬉しかった。

弥映の事が可愛くて、今すぐ抱きしめたい衝動にかられる。
ここが民宿なら、とつくな抱きついてキスをしていただろう。
だが、そうはせず立ち上がり、弥映にこう告げる。

〈主人公〉

「実は、お手洗いに行きたくて……」

●中央

「〔※マークまで、すんなり納得して。〕

『なんだ、そういう理由なら仕方ないか。どうぞどうぞ』と言ふ感じで
あ。お手洗い。なるほどね。

〔少し間をあけてから〕

そりや、このままじゃ行けないよね。

〔少し間をあけてから。一瞬『あたしも行こうかな』と言おうとするが、
『荷物もたくさんあるし、それは現実的ではない』と判断する〕

わかつた。

じやあ、荷物もあるしここで待つてる。

いってらっしゃい」※

理由を告げると、弥映はすんなり納得したようだ。
両手を振り、主人公を笑顔で見送ってくれる。

〈主人公〉

「ありがとう。じゃあ、ごめん。ちょっと待つてね」

……できるだけ、早く戻つてこよう。

主人公、そう思いながらフードコートを去る。

SE2　主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだんフードアウトする】

一度フードアウトする。

フェードアウトした後、5秒ほど空白の時間を流し、またフェードインする。

■ ※ここから次の「■」マークでくくった部分は音声化しない※

主人公、速足でフードコートから離れると、お手洗いのある百円ショッピングではなく、エスカレーターに向かつて、二階へと急ぐ。

二階にもお手洗いはあるが、目的地はそこではない。
そもそも『お手洗いに行く』という事自体が嘘だ。

主人公は今、弥映の靴を買いに、靴店へ向かつているのだ。

……実を言うと、少し目星は付けていた。

なぜなら、今弥映が履いているサンダルも、実は二日前に主人公がここで買ったものだからだ。

つまり、この靴店に置いているものは、何となく把握しているのである。

主人公、少しでも早く弥映の所に戻るため、わき目もふらずに靴店まで向かうと、狙つていた靴を探し始める。

……よかつた。あつた。

なかつたら、本当に手洗いって事にして戻らなきやいけなくなるところだつた。

それはすぐに見つかり、主人公はホツとして息をつく。
だが、安心するのはまだ早い。

今度は、きちんとサイズがあるかを確認しなくてはならない。
それでも、欲しいサイズはわかつている。

二十四センチだ。

——あの時、弥映ちゃんの靴のサイズを聞けて本当によかつた。

サンダルは漠然とMサイズだ。

だから、もし聞けないままだつたら、私はあの壊れた靴を、こつそり覗き見るしかなかつたと思う。

主人公、無事に二十四センチがある事を確認して、今度は二色あるうち、どちらにするかで迷う。

時間はかけられないが、選ぶ行為自体はとても楽しい。
胸がわくわくする。

……どっちも、弥映ちゃんに似合うと思う。

でも、より今日の服装に合つてると思うのは、こっちの色、かな。

主人公、この靴を履いた弥映の姿を想像すると、心が弾む。

弥映が『ありがとう』と笑つて、はしゃいで、跳ねるように歩いているところを思い浮かべるだけで、胸がいっぱいになる。

その気分のまま選んだ方の色を取り、レジへ向かう。

だが、問題は……。

〈店員〉

「三千三百円でござります」

……この靴が、決して高価とは言えないところだ。

もちろん、値段がすべてじゃない事はわかつている。
現に、この靴のデザインはとてもいいと思う。

値段相応の部分も確かにあるだろうが、値段以上に品があつて、可愛らしいし、何よりも
弥映に似合うと思う。

……でも、それは主人公の価値観だ。

弥映が、主人公と同じように思ってくれるとは限らない。

ただでさえ、とても気を遣う人だ。

おそらくあまり気に入らなくとも、弥映は笑つて『ありがとう』と言つてくれるだろう。
『その気持ちが嬉しい』と、主人公を抱きしめてくれるだろう。

でも、心の奥底では

『ああ、年下女がプレゼントしてくれるものなんて、所詮この程度か』

と、がっかりするかもしれない。

これを機に目が覚めて、主人公との関係を見直そうと考えるかもしれない。

主人公はそれが怖かった。

——だって、たとえば主人公があと十歳大人だったなら、一桁多い額のプレゼントだつ
てできる。

でも、今はできない。無理だ。そんなにお金を持っていない。

年が離れているとはそういう事だ。『今できない事』が、多すぎる事なのだ。

〈主人公〉

「……あ。プレゼント包装、お願いします」

〈店員〉

「かしこまりました」

この店員だって、今、どう思つた事だろう？

せいぜい家族か、友達へのプレゼントだろうと思うはずだ。

恋人として、年上の大人の女性にプレゼントするのがこの価格帯の靴だなんて、思わな
いだろう。

……途端に自信がなくなつてくる。

自分はこの靴を素敵だと思つたし、弥映に似合うと思つたから買う。
だからそれだけでいいのに、今は値段の事ばかり気にしている。
まったく自分らしくない。

まったく自分らしくないのに『自分とはこの程度の人間だ』と思い知らされているようで、胸が苦しい。

主人公、思う。

……なんだか今日は、自分の限界を感じる事ばかりだ。

弥映ちゃんの自慢の恋人になりたいのに、目につくのは無力で何も持っていない自分ばかり。

たとえば私が、今とは真逆の『弥映ちゃんより年上の、すごくお金を持っている男性』とかだったら違うのかな。

なんて、考えてもしようがない事を考えてしまう……。

……でも、これを手渡して、弥映ちゃんが喜んでくれたら、私はきっと自信が持てる。

弥映ちゃんが私を支えてくれる。

だつて私達は恋人なんだから。

ちょっと普通じやない形で始まった関係でも、今は本気だから。

この夏が終わつたつて、きっと付き合い続けられるつて。

少なくとも私はそのつもりだつて、言うんだ。

そんな事を考へて いるうちに、包装が終わつたようだ。
店員がにこやかに話しかけてくる。

〈店員〉

「お待たせいたしました。こちら商品でござります。
お買い上げありがとうございます！」

〈主人公〉

「ありがとうございます……！」

こうして主人公は包装された靴を受け取ると、すぐに鞄にしまい込む。
新しい包みを持つて いる事を、弥彌に見つかってはいけない。

このために今日は大きめの鞄で来たのだ。

そして、再び速足でフードコートへ向かう。

よかつた。買った。
よし、これで大丈夫。

私はこれから、弥映ちゃんにサプライズプレゼントをする。
それから、もう一回、真剣に告白する。

そしたらきっと、私達、もつと深い関係になれると思う。
そしたら、そうしたら……。

こうして、主人公がフードコートに戻ると……。

■ ※ここまで音声化しない※

ここから、もう一度SE1がフェードインして流れる。

● 中央 少し遠い

「あからさまにホツとして

あ……！」

弥映が、見知らぬ男性に声をかけられていた。

……えつ。

なに。何、あの人。

主人公、目の前の光景が理解できずに硬直していると、すぐさま弥映が近づいてくる。

SE3 弥映の足音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【だんだん近づいてくる】

弥映との距離が近づく。

● 中央

【あからさまにホツとして】

よかつた、やつと来た。

【男に向かって言っている。主人公と話している時と比べて、声が明らかに冷たい】
じゃあ、そういう事なんで、すみません】

弥映、主人公の手を握ると、左耳に耳打ちする。

●左 さきやき ※マークのセリフまでさきやく

「[耳打ちする】

行こ」※

ここでSE1がフェードアウトする。

弥映、主人公の手を取ると、説明もなしに、すぐさま歩き始める。説明がないのはいい、何が起きたのかはおおむねわかつている。でも……。

——あまりにも嫌なものを見てしまった。

弥映に声をかけていたのは、まさしく自分とは真逆の『年上』の『男性』で……。

明らかに、主人公よりも『お金を持つていそうな』人だつたからだ……。

SE4 弥映の足音2

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

足音が止まつてから5秒ほど沈黙。

●中央

「【※マークまで、うんざりして】

※『声をかけられて嬉しかった』と言う印象には、まずならないようにお願いします。※
はあ……あの人。しつこくて……。

一人になつた途端、急に声かけてきてさあ。

【誤解されたくない。きちんと自分たちの関係を伝えた事を主張したい】

付き合つてる人、待つてるつて言つたのに。

全然いなくなんないの」※

〈主人公〉

「……そつか」

主人公、それを聞いて顔が引きつる。

考えなくともすぐにわかる。弥映が声をかけられたのは、自分が不在だつたからだ。
いくら弥映が魅力的でも、同行者がいれば近寄つてこなかつただろう。

自分が離れていたせいで、弥映に嫌な思いや、不安な思いをさせてしまった。
申し訳なくて、泣きそうになる。

〈主人公〉

「弥映ちゃん、大丈夫だつた？」

何か嫌な事とかされたり、言われたりしなかつた？」

●中央

「※マークまで、優しく。主人公を安心させたい。主人公の気持ちが嬉しい。
それに、実際問題何もされていない。」

だから『嫌な事があるとしたら、あんたがなかなか戻つてこなかつた事だよ』
という言葉を飲み込む

ん？

大丈夫だよ。なんかされた訳じやないし。 ※

〔少し間を開けてから。〕

少しぐつたりして。また先ほどの男性と遭遇するかもしれないと思うと、嫌でたまらない

でも、しばらくどつか隠れてた方がいいかな。

このまま出ても、また会つちやうかもしれないし」

それでも、弥映の声は明るい。

主人公を心配させまいとしているのだろう。

気を遣われるべきは弥映の方なのに、実際は主人公が弥映に気遣われている。

主人公はますます胸が苦しくなつたが、それでもまだできる事はある。

主人公は何度もこの街に来ている。『邪魔者』を回避する手段だつて持つてているのだ。

〈主人公〉

「……そしたら、ちょっと離れた所まで歩いてみる？」

それで、帰りは行きとは違うバス停から帰ろうよ」

●中央

〔驚く。その発想はなかつた〕

へ？

〔主人公の提案を噛み砕いて、復唱する〕

あ、帰りは乗るとこずらして、行きとは違うバス停から乗ろうつて事？」

〈主人公〉

「そう。まだ昼間だし、その方が安心だと思う。
この辺の事なら、私結構わかるし」

主人公はこの時、弥映に主張したかつた。

自分は、あの男性よりも優秀だと。

周囲には恋人と認識されなくとも。年下でも、お金も持つていなくても。
自分は誰よりも弥映を想っているし、弥映の役に立つと。

●中央

「声が少し明るくなる。主人公が自分の事を考えてくれたのが嬉しい」
いいね。そうしよう。

〔気を取り直して〕

なんか、探検つて感じだね。
行こ！」

〈主人公〉

「……うん！」

SE5 弥映の足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだんフェードアウトする】

だから主人公は弥映の手を取り、ろくな確認もせずに歩き出す。

もしもこの時、主人公がもつと冷静だったなら、まずはスマホを開いていたはずだ。

どのバス停に向かうかきちんと話し合って、それから外へ出ていたはずだ。

それなのに、今は一刻も早くここから離れたくて、思いつくままに足を進めてしまう。

……それが、今日を大きく変えていく。

ここでフェードアウトして終了。